

鍾馗

禪竹作

前

ワキ 終南山麓の人

シテ 老翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 鍾馗

地は 唐土

季は 秋

ワキ詞

「是は唐終南山の麓に住居する者にて候。さても我奏聞申すべき事の候ふ間。唯今帝都に趣き候。

道行

「終南山を立ち出でゝ。く。野草の露を分け行けば。遠村に煙満ち。人屋しるき眺望の。海路遙かに過ぐれば。釣の小舟もかへる波。寄る程もなきながめかな。く。

シテ詞

「なふくあれなる旅人に申すべき事の候。

ワキ詞

「何事にて候ふぞ。

シテ

「我昔し誓願の子細あるにより。悪鬼を亡ぼし国土を守らんとすの誓ひあり。君賢人をなし給はゞ。宮中に現じ奇瑞をなすべきとの。此事を奏してたび給へ。

ワキ

「是は不思議の御事かな。さてく御身は如何なる人ぞ。

シテ

「今は何をか包むべき。我は鍾馗と云へる進士なるが。及第のみぎんに亡ぜし。其執心を翻へし。後

世に猶望みあり。

ワキ

「実にく鍾馗の御事は。世に隠れなき進士なるが。其亡心にてましますか。」

シテ

「中々なりと夕暮の。」

ワキ

「物冷ましき。」

シテ

「折柄に。」

地

「草虫露に声しをれ。く。尋ぬるに形なく。老松既に風絶えて。問へども松は答へず。実にや何

事も。思ひ絶えなん色も香も。終には添はぬ花紅葉。いつをいつとか定めん。いつをかいつと定めん。

クセ

「一生は風の前の雲。夢の間に散じ易く。三界は水の上の泡。光りの前に消えんとす。綺らん殿の内には。有為の悲しみを告げ。翡翠の帳の内には。有漏の願力有りとかや。栄花は是れ春の花。昨日は盛なれども。今日は衰ふわんりきの。秋の光り朝に増じ。夕べに減ずとか。春去り秋来つて。花

散じ葉落つ。時移り気色変じて。楽しみ既に去つて。悲しび早く来れり。

シテ「朝顔の。花の上なる露よりも。

地「はかなき物はかげろふの。有るか無きかの心地して。世を秋風のうち靡き。群れ居る田鶴の音を鳴きて。四手の田長の一声も。誰が黄泉路をか知らすらん。あはれなりける人界を。いつかは離れはつべき。

ワキ詞

「是は不思議の御事かな。急ぎ帝都に趣きつゝ。委しく奏聞申すべし。暫く待たせ給へとよ。

シテ「とても見みえし夢の内。誠の姿を頭はさんと。

ワキ「いふより早く。

シテ「気色変りて。

地「伝へ聞く仏在世の。く。浄蔵浄眼の如くに。其高さ七多羅樹。虚空に上りては座せしめ。地に入つては火焰を放して。水を踏む事陸地の如くに。

さら／＼と走り去つて。形はさながら山彦の。

く。声ばかりして失せにけり。く。（中人）

ワキ歌

「苔のむしろに法をのべ。く。さも冷ましき山陰

の。嵐と共に声立てゝ。此妙経を読誦する。く。

後ジテ

「鬼神に横道なしといふに。何ぞみだりに騒がしく。

汝知らずや我心。国土を守る誓ひあり。

地

「宝剣光り冷ましく。日月影おろそかに。松嵐梢

を払ふが如く。悪鬼の乱れ恐れ去つて。実にも鍾

馱の精霊たり。

ロンギ地

「有難の御事や。そも君道を守らんの。其誓願の御

誓ひ。如何なる謂なるらん。

シテ

「鍾馭及第のみぎんにて。我と亡ぜし悪心を。翻へ

す一念。發起菩提心なるべし。

地

「実に誠ある誓ひとて。国土をしづめ別きて実に。

シテ

「禁裏雲井の楼閣の。

地

「こゝやかしこに遍満し。

シテ「あるひは玉殿。

地「廊下の下。御階の下までも。く。剣をひそめて
忍びくに。求むれば案の如く。鬼神は通力失せ。
顕はれ出づれば忽ちに。ずたくに切り放して。
まのあたりなる其勢。唯此剣の威光となつて。天
にかゝやき地に普く。治まる国土となる事治まる
国土となる事も。実に有難き誓ひかな。く。